

### 第三章 メイプルリーの贈り物

#### 放課後。

浩一は、ひとり屋上の手すりにもたれ、ぼんやりと秋の空をながめていた。かぎりなく深く透明で、切ないほどに清々と澄みきっている、今、このときの空の青さが、浩一はいちばん好きだった。

春の、穏やかではあるが、ぼんやりと霞のかかったような空の青。あるいは、夏の、開放的でいかにも陽気な空の青。

そして、冬の、どことなくよそよそしく、凍てつくような氷の青。などどくらべると、やはり秋の空の青さは格別だ。人の心を惹きつけてやまない何かがある。

浩一が柄にもなく、そんな詩的で感傷的な気分になり、己が前に在る雲ひとつない空をながめていたのかどうかはわからないが……。ともあれ、きょうの秋天は太陽が正中した今の時刻でも、十分に深い青をたたえ、人々をつつみこんでいた。

「いい天気ね……」  
とつぜん耳もとで生まれた澄んだささやき声に、浩一は瞬間、呼吸を止めてふりむいた。

かりんだった。  
授業中、三つ編みにしていたせいで残ったゆるやかなウェーブ。その黒髪を、今は背中へとながし、くちもとに微笑を浮かべて佇んでいる。

胸に抱えている、ふたつの鞆のうち、ひとつは浩一のものだろう、キズだらけのうえ、わざわざ平たくつぶしてあるのですぐにわかる。

「なんだ、かりんか……」

浩一は、ひとことそっけなく言い、ふたたび視線を空のかなたへと戻した。

「なんだはないでしょう、ひとがせっかく気をきかせてお弁当もってきてあげたのにい！」

「……………」

かりんが口をとがらせても浩一は、何も答えようとしなない。

かりんは、足もとにふたつの鞆をそつと置き、浩一とならんで手すりにもたれかかった。

「ここで食べていくんじゃないの？」

浩一の瞳をのぞき込むようにしてかりんが訊く。だが、浩一の返事はあくまでもそっけない。

「ああ……。でも、いまはいい」

「そう……」

かりんは、まつげをふせてひとことだけ、つぶやくように言った。  
ながい沈黙。

ふたりとも、それぞれの理由から、ただ目の前に広がる蒼穹をながめているだけで、ことばを交わそうとはしない。おたがいの存在をあえて無視しあっているかのように。

かりんのしなやかな黒髪が、ときおり吹く微かな風にそよいでいる。

まるで、世界が止まってしまったかのような錯覚にかるい目眩を感じた浩一は、たしかな実在をもとめ、思わずかりんをふり返っていた。

かりんはおだやかな表情で目をとじ、つかのま、まどろんでいるかのようにも思えた。

浩一が声をかけようかどうしようかためらっていると、ふいに、彼女のくちびるが微かに上下し、声が風となって流れだした。

小春日に舞を舞いたる光の精霊かな

かりんは時々、即興で俳句や短歌の類を詠むことがある。もっとも、ここしばらくはそのようなこともなく、かりんにそういう習いのあったことなど、なかば忘れかけていた浩一ではあったが、黙って次のことばを待った。常ならば、すぐにその感想をもとめてくるからだ。

しかし、きょうのかりんはいつもとちがい、批評を請うどころか、浩一の顔のをぞき込み、秀句、駄句の判断をすることさえしようとはしなかった。

かわりにその口からもれてきたのは、意外な言葉だった。

「こうして、お日さまの光を浴びていると、あたたかくて、まるでひかりの海にとけていくみたいで、とてもきもちいい。嫌なこと、辛いこと、なにもかも、すべて忘れてしまえそんな気がする」

「……………」

かりんの、あの何げない十七文字の底に、そんな想いが沈んでいるのだとしたら、批評など要るはずもない。ただ、身近にいる誰かに聞いてもらえれば、それで充分だったのではないか。浩一はそんなことを考えつつ、おしゃべりなねむり姫の吐息に耳をすましていた。

と、ふいにその二重がゆっくりとひらき、ごく自然に瞳と瞳があつた。

「フォトンっていう部分、あるでしょ？ あそこはね、そのまま仮名で書かないで、漢字をあてようと思うの」

どう思う？ そう訊かれたような気がして、浩一は、答えを返した。

「なるほど“光子”って書いて“フォトン”って読ませるわけか」

「ううん、“光の精霊”って書いて“フォトン”って読んでもらうつもり」

「光の……精霊か……………」

浩一はそこでしばらく考えこみ、言葉を継いだ。

「確かに、いい表現だとは思う。でも、せつかくそこまで捻るんなら“精霊”よりは“妖精”のほうが、やわらかな感じがして……………」

「だめよ、それじゃ意味がないの！」

浩一の言葉を途中でさえぎり、かりんは語気強く言った。しかし、浩一の怪訝そうな顔に気がつく、すぐに表情をやわらげ、こころもち睫をふせて、謝意をあらわした。

浩一はそんなかりんの態度に、あえて反論することを避けたが、やはり訊くべきだったのだ。妖精ではなく、精霊でなければ意味がないと言った彼女の真意を。そうすれば、あるいは気づくことができたのかもしれない。かりんがあの俳句に込めたほんとうの想い、浩一に伝えたかったほんとうのメッセージに……………。

ややあつて、かりんはふたたび浩一の視線をとらえ、たずねた。

「ねえ、浩ちゃん、こんなふうに感じたこと、ない？ この瞬間が永遠につづいてほしい、このまま世界が止まってしまえばいいのにつづ……………」

照れのためか、浩一はふつと目を逸らし、言葉を返した。

「永遠なんて、退屈なだけだろ？」  
「あら、幸せって、退屈なものよ……」  
かりんのこの言葉を最後に、ふたたび、静寂の鐘がふたりをつつみこんだ。

数分後。

浩一はわずかに眉根をよせて腕の時計を一瞥すると、屋上中央の階段室をふり返った。そんな浩一の、落ちつかないそぶりに気づいたのか、かりんがその顔を下からのぞき込むようにして、たずねてきた。

「ねえ、だれか、まってるんでしょ？」

「べつに……」

すぐ間近に感じるかりんの視線を避けるように、目を閉じ、そっぽを向く。

「ふうくん、じゃあ……これはなに？」

そう言いつつ、かりんは浩一の胸ポケットから、ちょこんと顔を出していた例の封筒を引き抜いた。

「この手紙の娘と、ここで待ち合わせしてるんでしょ？」

「ば、ばか、返せっ！」

浩一は、かりんの手からあわてて手紙を引ったくり、制服の内ポケットにしまいこんだ。

「つたく、手癖がわるいやつだな！」

「あら、これみよがしに胸ポケットなんかに入れて、見せびらかしてるからですよ！」

「ふん、かりんの言うとおり、おれはこれをくれた娘と、ここで待ち合わせしてんだよ。それがわかったら、さっさと帰れ！」

とうとう開き直った浩一は、邪険そうに手を振って、かりんを追い払った。

つもりだったが、かりんは浩一の言葉など、まるで聞こえなかったかのよう  
に身を乗りだし、訊いてきた。

「ね、なんて名前の娘？」

「黙れっ！」

「ふうくん……」

かりんはちよっぴり身をひくと、茶目つけたつぷりに手をさしだした。

「はいっ！」

「な、なんだよ、その手は！」

「うん、浩ちゃんが忘れないうちに、メイプルリーフ、もらっておこうと思って……」

浩一が、パシッとかりんの手を叩く。

「ばか言ってるじゃねえ！ 約束の期限まで、あと一週間も残ってるだろ！」

「でも、いくらまっても浩ちゃんの期待してるような娘、来ないと思うけど？」

「ちっ、とうぜんだろ！ かりんが屋上にいたんじゃ……」

浩一は、そこまで言っつて、ふいにことばをきった。

かりんの顔から、ふっといたずらっぽい微笑が消えうせた、その瞬間、確かに見えたような気がしたからだ。その瞳の奥にひそむ、深い悲しみの色が。

つかのまの沈黙のあと、かりんはまっすぐに浩一を見つめ、言った。

「その手紙書いたの、わたしの……」

「なに!？」

まじまじと、その顔を見つめかえす浩一。

かりんは、いったんは浩一の視線を正面から受け止めたものの、すぐに睫をふせ、うつむいてしまった。

「う、うそだ！」

「どうして……うそだっと思っの？」

顔を伏せたまま、かりんが訊きかえず。

「どうして……」

浩一は、数秒ほど考えこみ、言葉を継いだ。

「手紙には、ちゃんと差出人の名前が書いて……」

「うそっ！ わたし、名前なんて書かなかったわ！」

かりんはパッと顔を上げると、咎めるような口調で言いかえした。

「浩ちゃんはその手紙のこと、恋文か何かだと思ってるみたいだけど、お生憎さ  
ま。もう一度、手紙の文面をよーく読んでごらんなさい。好きですとか、愛し  
てますなんて、ひとつとも書いてないんだから！」

浩一が内ポケットから、ふたたび薄桃色の封筒を取りだし、手紙の内容を確かめようとしているのを見て、かりんはじれったそうに、

「いいわ、その手紙になにが書いてあるのか、教えてあげる！」

そう言った。そして目をとじ、大きく息をすいこむと、まるで詩の朗読でもするかのような調子で、手紙の文面を暗唱しはじめた。

「 拝啓、浩一様。突然このようなお手紙を差しあげますご無礼、どうかお許し願います。」

どうしても、浩一様にご相談に乗っていただきたいことがあり、恥をしのんでペンを取りました。ですが、この手紙が何らかの事故により、浩一様以外の殿方とのがたの目に触れてしまったときのことを考えますと、今ここで内容まで書き記しるすのは心苦しく存じます。また、同様の理由から、どうしても名前を明かすことができません。匿名とくめいの手紙となってしまうこと、謹つつしんでお詫わびびいたします。

つきましては、今日の放課後、お忙しいとは存じますが、屋上までお越し願えませんでしょうか。直接お会いして、二人きりで話す機会がもてれば幸いに存じます。

浩一様が、私の前に現れてくださることを心から願いつつ、いつまでもお待ちもうしております。かしこ「

かりんはそこでいったん息をつき、あっけにとられている浩一をふり返った。そして、少しためらいがちに。

「……………」

「……………」

浩一は押し黙ったまま、それまで手にしていた文殻ふみからをかりんにつきだした。

「浩ちゃん？」

かりんは思わずその手紙を受けとったが、浩一が自分の鞆たもとを手にして歩きだしたのを見、あわてて後あとを追った。

「まっつて、浩ちゃん！」

浩一は、そう言われて立ちどまりはしたが、背中せなかのかりんをふり返ることはなかった。

朝、どうしてかりんは、担任の相原から自転車を借りてまで、急ぎ学校くに来る必要があったのか。また何故なにゆえ、うわばきに履はきかえるのを忘れたという、たったそれだけのことで、あんなに笑いこけていたのか。

浩一には、今、すべてが理解できたような気がした。

「かりん、おれをからかうのがそんなに楽しいのか？」  
「え？」

かりんの手から、さくら色の玉梓たますずひがこぼれおちた。

「どうやら、本気で浩一を怒おこらせてしまったらしい。そう気づいたかりんは、浩一の前にまわり込み、あわてて釈明しゃくめいしはじめた。

「ちがうの！ わたし、浩ちゃんのこと、からかったわけじゃないの！ほんとに相談したいこと、あったから……」

「相談だあ!? だったら、どうしてこんな手の込んだまねするんだよ！ 口くちで言えばすむことだろ！」

「そ、それは……」

かりんは浩一から視線をそらし、それっきり黙り込んでしまった。

浩一はそれ以上にも言わず、そのままかりんの横をすり抜け、歩きだした。そのとき。

「……ごめんなさい」

意外、というほかはなかった。

強情かきで勝ち気きなはずのかりんが、今回こんかいに限かぎっては、いたって素直すなおに謝あやまってきたからだ。

浩一の記憶によれば、過去、ふたりがやり合ったどんな場面においても、かりんのほうから先に謝あやまってきたことなど、一度としてなかった。

たとえその非ひが、かりんの側がわにあると、彼女自身、気づいているようなふしがあつたときでさえ……。

それゆえ浩一は、思わず立ち止まり、ふり返らずにはいられなかった。かりん!?

そこには、いまにも泣きだしそうな表情で、悄然しんげんと立ちつくしているかりんの姿があつた。

「浩ちゃん、ごめんなさい……」

つぶやくように、かりんがくり返す。

浩一はひとつ深いため息をついたあと、声の調子をやわらげ、言った。

「話してみるよ、おれに相談したいこと、あるんだろ？」

「浩ちゃん、もう怒ってない？」

「怒ってるさ！ 怒ってるけど……いちおう、話は聞いてやる」

かりんはくちびるをかみしめ、目を閉じてかすかにうなずくと、浩一がかろうじて聞き取れるほどの小さな声で、話しはじめた。

「お兄ちゃんの、ことなの……」

「！」

「お兄ちゃん、山で事故にあって死んだって浩ちゃんには説明してたけど、ちがうの」

「え？」

「お兄ちゃん、ほんとうは……」

かりんは、そこまで話したところで言葉につまり、うつむいてしまった。

「かりん？」

「う、うん、やっぱりいい。また、こんどね……」

「なんだよそれは、言いかけてやめるなんて卑怯だぞ！ おれにできることなら、どんなことでも力になってやるから……話してみるよ！」

「……ありがとう。でも、もういいの。なにも、聞かなかったことにして」

「そんなわけにいくかよ！ 史郎兄貴、事故で死んだんじゃないって、今、たしかに言ったよな。じゃあなんで……まさか、誰かに殺されたんじゃない……」

「そ、そんなこと、ないわ……」

かりんは驚いたように顔を上げ、浩一の思いもかけない問い掛けを、あわてて否定した。

だが、浩一がその顔を探るようにのぞき込むと、すぐに目をそらし、背中を向けてしまう。

「そうなんだな！」

「……………」

「史郎兄貴が自殺するなんて考えられないし、事故で死んだんじゃないとなると、他殺という線以外は考えられないからな」

浩一は、かりんの肩に手を掛けて、強引にふりむかせた。

「それで、犯人は……」

「浩ちゃんのばか！ 探偵か何かにもなったつもり？ ひとりでかってに決め

つけて、はなしを進めないでよ！」



かりんは、きつ、と浩一をにらみつけ、ほとんど叫ぶようにそう言った。が、すぐに瞳をふせ、声を落として謝った。

「あの、ごめんなさい」

浩一は、一瞬面食らったが、それでもかりんの顔から目を離さず、たずねた。「じゃあ、史郎兄貴はどうして……」

かりんはしばらく黙ったままうつむいていたが、やがて顔を上げ、まっすぐに浩一の瞳を見つめて、声を押しだした。

「お兄ちゃん、喉を……」

「え？」

「野犬に、喉をかまれて……それで……」

かりんの瞳から、大粒の涙があふれだし、頬をつたって落ちていった。

浩一はかりんの言葉と、かりん自身の流した涙の両方に衝撃を受け、声を失った。

史郎兄貴がそんなむごい死にかたを？

それでかりんは……。

「まいばん夢に見るの、そのときのこと。それで、最近なんだか……。ごめんね、こんなこと、浩ちゃんに相談するなんて……」

浩一は、黙ってかりんの肩を抱きしめた。

「あ……」

かりんはつぶやくように言い、からだを固くしたが、すぐに緊張をといて浩一の胸に顔をうずめた。

どのくらいのあいだ、そうしていただろう。

いつしか、おたがいの鼓動が同調するように、ひとつに重なっていった。

おそらく、そのことに気がつき、意識してしまったのだろう。かりんはふいに顔を赤らめ、浩一から、からだを離れた。

「あ、あの……。そのときのこと、あまり思いたくないの。もう、へいき。だいじょうぶだから……。これいじょうは訊かないで」

浩一は静かにうなずいた。

「浩ちゃん」

「え？」

「ありがとう」

「ああ……」

浩一は困ったような笑みを浮かべ、鼻の頭を薬指でかきながら、おちつきなく視線をおよがせた。そして、ふと、足もとにおちていた例の手紙に気づき、拾い上げてふたたび胸のポケットにしまいこんだ。

一呼吸おいて、浩一が言う。

「かりん、元気だせよ！ おれじゃあ、史郎兄貴の代わりには、なれないかもしれない。けど……」

「ううん、浩ちゃんは、浩ちゃんのままでもいい」

「そっか……」

かりんは指先で、残っていた涙をふきとり、にこつと微笑んだ。

「ねえ、浩ちゃん……ここでお弁当たべたら、わたしと……」

「え？」

「ううん、なんでもない」

「なんだよ、また言いかけてやめるのか」

「……」

しばらくの沈黙のあと、かりんは大きく息を吸い込み、口をひらいた。

「じゃあ、言うね。浩ちゃん、わたしと……デートしない？」

「デートって……かりん、マジで言ってるのか？」

「わたしとじゃ……いや？」

かりんは、まともに浩一の顔を見ることができず、爪先に視線を落としたまま、もじもじしている。

かりんからの突然の誘いに、浩一はどう返答していいかわからず言葉につまんでしまった。だが、かりんが黙ったまま浩一の返事を待っている以上、何か答えらしきものを返さなくてはならない。

浩一は考えあぐねたすえ、言った。

「かりん、デートってというのは、ふつう、恋人同士がするもんだぜ。おれたちは、たんなる幼なじみなわけだし……。どこか行きたいところがあるっていうんなら、暇だからつきあってやってもいいけど、デートっていう表現は、心理的にちょっと、抵抗ある……」

しかし、浩一とは長いつきあいのかりんである。言葉の上での否定が、かならずしも、その本心をあらわしているとは限らない。ということを経験上よく理解していた。

かなり長い沈黙のあと、かりんは、上目遣いに浩一の瞳をのぞき込んだ。そして、風にまぎれて消えてしまいそうなほど小さな声で、つぶやいた。

「きょうだけ、きょうだけでいいから恋人になってって……言ったら？」

「……………」

浩一は、しばらくためらったのち、すつとかりんを抱きよせ、耳もとで囁いた。「かりん、それなりの覚悟はできてる？」

「それなりの、かくごって……………」

かりんは耳の先まで深紅に染め、浩一の腕のなかでわずかに身をよじった。

「ちよ、ちよっと、こ、浩ちゃん？」

だが、浩一はそのまま、上気したかりんの頬をのひらでつつみこみ、ゆっくりと顔を近づけていく。

「あ……………」

かりんが言葉にならない声をあげた。

その瞬間。

ふたりのあいだで時はその意味を失い、すべての音が遠のいていった。

かりんは、瞳をとじ、ごく自然にそのからだを浩一にあずけていく。

小春日の光子たちに祝福されながら、ふたりのあいだを、ゆっくりと、世界がながれていった。

「浩ちゃんの、ばか……………」

浩一から自由になったあと、かりんはうつむいたまま言った。

「なんだよ、きょうだけでいいから恋人になってくれって言うてきたの、かりんのほうだろ？」

「……………」

かりんは、指先をそっとくちびるにあて、顔をあげた。

「きょうだけって、言ったのに…………」。浩ちゃんのいじわる

この、かりんのつぶやきともとれる、かわいい“抗議の声”を耳にした浩一は、天を仰いで、ふうっと、大きく息をはきだした。

意地悪なのはかりんのほうだろ。

きょうだけってわけに……いくかよ。

そう思いながらも、浩一はふたたびかりんに視線をもどし、ささやいた。

「かりん、手をだして」

「え？」

「いいから、手を……」

浩一はかりんの手を取ると、てのひらを上に向けさせた。そして、なにか小さい硬貨のようなものを乗せて、それを握にぎらせる。

「これ……」

かりんはそう言って手をひらき、なかのものを見た。

メイプルリーフ金貨だった。

「浩ちゃん？」

「賭かけはどうやらおれの負け……みたいだからな、やるよ。べつに、きょうの記念についてわけじゃないぜ」

「……………」

かりんは、メイプルリーフをきゅっと握にぎりしめ、言った。

「ありがとう、大切にするね」

白を基調にした、ごくあっさりとした調度ちやうどの部屋。

茶系の絨毯じゆじたんの中央に、応接用のテーブルと椅子いす。部屋の隅すみには、かなり大きめのプラズマ液晶テレビや、DVDなどのAV機器が置かれている。

ここ、紺野家のリビングには、千鶴のほかに誰もいなかった。

風呂から上がったばかりの千鶴は、素肌すはだの上にバスタオルをまきつけただけという、少々はしたない格好かっこうで、エアコンの下に立っている。温風をドライヤーがわりにして、髪を乾かわかしていたのだ。

時刻はすでに夜の十時をまわっている。

千鶴の両親は、紅葉がきれいなこの季節にと、有給を利用し、夫婦で一週間の温泉旅行にでていて留守だった。

きのうと一昨日おとといのこの時間には、かりんや浩一がいっしょだったので、少しはにぎやかだったのだが。

千鶴は、テーブルの上にきちんとならべて置いてあるシチュー皿やスプーンにフォーク、それに野菜サラダの盛りつけてある小鉢こぼちやバターロールの山などを見まわして、ほーっとため息をついた。

もしかしてあの子たち、あたし一人をのけ者にして外で食事でもしてるんじゃないか……。

瞬間、そんな悲しい考えが、千鶴の脳裏のうりをよぎった。

「いいわよ、無理してあたしのまずい料理なんか、食べてくれなくても……」

千鶴が声に出してつぶやいた、ちょうどそのとき。突然チャイムが鳴り、浩一の声がインターホンを通して聞こえてきた。

「千鶴う、ただいまあ。寒いから早くロック外はずしてくれーっ」

千鶴は大股东おおまたで玄関げんかんへと急ぎ、ドアチェーンを外はずしながら口をとがらせた。

「いったいどういうつもりなの!? 遅くなるんなら、電話ぐらいしなさいよ！ 携帯もついでたんでしょ？」

「なに怒鳴どなってんだよ。まだ十時だろ、ガキじゃあるまいし……」

はんぶん裸はだかの千鶴の前に、ジャケット姿の浩一が現れた。その背中せなかに、なかば隠れるようにして、かりんが立っている。

「あら……」

かりんは、千鶴が一度も目にしたことのない白のワンピースに、ニットのカーディガンをあわせ、髪をアップにしてキュートにまとめている。

ふだん浩一と出掛けるときは制服やジーンズなど、わりとラフな格好を選ぶことが多いかりんの性格から考えれば、今の装よそおいは妙といわざるを得ない。

すぐにピンときた千鶴は、目を細めて浩一の顔を見やった。

「ふう〜ん、そういうことだったの！」

「な、なんだよ!」

千鶴は、かりんに向かってにつこりと微笑ほほえみながら問いかけた。

「ねえ、かりんちゃん。デート、楽しかった？」

「え? あ、あの……」

答えるに答えられず、しどろもどろのかりんにかわって、浩一が言葉を返した。「何わけのわかんないこと言ってんだよ。渋谷でちょっと映画を観みてきただけだろ!」

「あら、巷<sup>ちまた</sup>では、若い男の子と女の子が、一緒に映画を観<sup>み</sup>に行ったりするのをデ  
ー卜<sup>うらな</sup>つていうのよ!」

「……………」  
ふたりとも、心持<sup>こころも</sup>顔を赤らめ、黙<sup>もく</sup>り込んでしまったのを見て、ささやかな復  
讐<sup>しゅう</sup>に満足した千鶴は、いきなり話題を変えた。

「あ、そうそう、浩一に女の子から電話があつたわよ。とても大事な話があるか  
ら、今日<sup>けふ</sup>中に電話してほしいって。一応、電話番号メモしておいたけど……………」

「へえ、だれ?」

なんとなく、横目でかりんを気にしながら、浩一は小声で聞き返した。

「ごめん、なまえ忘れちゃった」

「……………」

千鶴が嘘をついているのは明白だったが、かりんが隣にいることもあり、浩一  
はそれ以上の追及はしなかった。

「ほら、そんなところでぼーっと突っ立ってないで、はやく電話してあげなきゃ。

レディをあんまり待たせるもんじゃないわよ」

千鶴に言われるまま、浩一は携帯を取り出したが、肝心の電話番号がわからな  
いことに気がつき、玄関を上がって奥へと向かった。

「電話のメモリーに入ってる番号と連絡先の番号、ちがうみたいだから注意して  
ね」

千鶴の言葉に、浩一がちらつとふりむく。

「番号のメモは、パソコンのディスプレイに貼<sup>は</sup>っておいたから」

「わかった」

浩一が奥の部屋へと消えたあと、千鶴は少し落ちつかない様子のかりんの顔を  
のぞき込み、たずねた。

「やっぱり、誰だか気になる?」

「……………」

かりんは無言<sup>むげん</sup>のまま、千鶴の好奇心のこもった視線を避<sup>さ</sup>けるように背中を向け  
た。

ドアのノブに手を掛<sup>か</sup>け、そのまま帰ろうとする。

「もう、遅いから、きょうはこれで……………」

「あら、電話の娘がだれだか知りたくないの？」

「……………」

「かりんちゃんをよく知ってる女よ」

「えっ!？」

千鶴の言葉に、かりんが思わずふり返る。

「ほら、やっぱり気になるんじゃない!」

じつと自分を見つめる、かりんの瞳の色を見て、千鶴は微かな笑みをもらした。狭い廊下を通してリビングへと向かう千鶴の後を、かりんがためらいがちにつづく。

千鶴は、やわらかな照明のともったりリビングに入ったところで、ぴたっと立ち止まり、かりんをふり返って、言った。

「その娘に、浩一の携帯の番号教えてあげてもよかったんだけど、もし、浩一が、かりんちゃんとデートでもしてるんだったら、ふたりの仲に水をさすようなことにもなりかねないし、黙ってたほうがいいかなって……………」

「わたしは別に……………」

「気になんてしなかった?」

「……………」

「浩一に電話してきた女はあ……………」

もったいぶった言い方で、かりんの反応をうかがう千鶴。

「かりんちゃんのお……………」

「…………!？」

「相原先生」

「なっ……………」

「どう、安心した? けど、あいてがああの相原先生じゃ、あんまり安心とはいえないかもね」

千鶴の一言ひとことにより、かりん表情がめまぐるしく変化する。

「小姑の嫁いびりって、こんな感じなのかしら。なんか、くせになりそう……………」

ねえ、かりんちゃん。あたしの背中に、黒い羽かなんか見えたりしない?」

千鶴はそう言つと、複雑な顔つきで自分を見ているかりんに向かい、くすつと笑って見せた。

かりんが何か言いかけたとき、むっとした表情の浩一が部屋に入ってきた。

「今晚のデートのお誘い？」

と、ちやかすように千鶴が言う。

「ふんっ！ 胸の谷間もできないような、発育不良の貧乳女のくせに、そういうセリフだけは一人前だよな！」

「なんですって！」

「小学生にさえ負けてるかも……」

「……………」

ぶちっ。

千鶴の中で何かが切れた。

千鶴はつかつかと浩一に向かって近づいていくと、いきなり平手打ちを食らわせた。いや、正確には平手打ちを食らわせようとして空振りしたと言っべきか。浩一がスウェーでかわしたからだ。

「この、何でよけるのよ！ こういうときは、わざとぶたれるのがお約束でしょ！」

「そんなお約束、いつたい、何時、誰が決めたんだよ！」

千鶴がふたたび手を振り上げたのを見て、浩一は、ぱつと後ろに飛び退さる。

「浩一っ！」

「おっと、あんまり激しく動きまわると、うす〜い胸の上で留めてあるタオルが、外れて落ちるぜ！」

「な……………」

浩一に指摘され、千鶴は間髪一髪のところ、外れそうになっていたバスタオルを押さえつけることに成功した。

「この……………」

千鶴は左手で、バスタオルを引っ張り上げるようにして押さえたまま、もう片方の手でテーブルの上ののっていたバターロールを一つ取り上げ、浩一に向かって投げつけた。

今度は避けたりせず、片手でバターロールを受けとめて、浩一が言う。

「あんまり食べ物を粗末にするなよな」

「うるさい！ この借りはいつか必ず返すからね、おぼえときなさい！」



千鶴は一瞬、キツと浩一をにらみつけ、自室へと駆け込んでいった。その背中を見送りながら、かりんは言った。

「浩ちゃん、いくらちいちゃんの胸が小さいからって、あんな言いかたしたら……」

千鶴の部屋から声だけが飛んできた。

「かりんちゃん、聞こえたからね！」

「あ……」

かたまっているかりんを横目に見ながら、浩一がぼそつとつぶやいた。

「絶交、決定かもな……」

浩一は、自分の机の上にあるパソコンに向かい、キーボードを叩いていた。ワープロで日記を付ける習慣があるのだ。

だが、あるところまでいくと、キーを叩く手がピタツと止まり、それ以上進まなくなってしまう。もちろん、昼、学校の屋上で、かりんとの間<sup>あいだ</sup>に起こったことをありのまま、つつみ隠さずに書くべきかどうかで悩んでいたのだ。

「千鶴のやつ、ときどきかつてに人の日記を読むからな……」

浩一は、まるで誰かに言い訳でもするかのようにつぶやいた。

「かといって、いちいちパスワードを設定するのも面倒だし、どうするか……」  
 ややあって、ディスプレイを見つめたまま、ぼうつとしていた浩一の耳に、突然、電話の呼び出し音が飛び込んできた。

浩一は、はっと我<sup>われ</sup>にかえると、あわててマウスを操作し、電話のウィンドウを開いた。

画像は表示されない、音声のみの電話だ。

「……………」  
 ………………」

しばし、無言の時間がながれ去った。  
 浩一が電話を取ったときの癖で、相手のほうから名乗るまで、こちらの名前を告げないのだ。とくに、相手側の電話番号が表示されず、誰<sup>だれ</sup>から掛<sup>か</sup>かってきたのか判<sup>わか</sup>らないような場合は。

が、電話の相手も、名前を名乗ろうとしない。このままでは埒<sup>らち</sup>があかないので、浩一はしかたなく、

「もしもし……」

とだけこたえた。すると、

「浩ちゃん？」

と、声が返った。なんのことはない、かりんだった。

「なんだ、かりんか……」

「う、うん……。ちいちゃんだったらどうしようって思ったら、なんか声がでなくなっちゃって……ごめんね」

「何だよ、仲直りしたんじゃないの？」

「そうじゃなくって……」

「もしかして、おれに用があった？」

「……うん」

「で？」

先をうながすように浩一が訊く。

「なんか、面と向かって話すの、はずかしかったから電話したんだけど……迷惑だった？」

「……いや。それより、話して？」

「……うん。あの……。浩ちゃん、今までいろいろありがとう。楽しかった」

「……何、それ？ まるで今生こんじょうの別れみたいなセリフじゃん」

「……」

「かりん？」

「そう、だね。……でも、わたしの、本当の気持ち……だから」

ふっと、浩一の胸を不安がよぎった。

いきなり自分の目の前から、かりんがいなくなってしまふような気がしたのだ。次の瞬間。浩一は、自身の胸中に浮かんだ疑念をそのまま言葉にして、かりんにぶつけていた。

「何も言わずに、おれの前から姿を消しちまふようなこと、ないよな？」

「え？ ……どういう、意味？」

「たとえば、お袋さんの実家の方に引越すとか……」

「……それは、ないと思う。おかあさん、かなり回復してきたみたいだし、もうすぐこっちに戻ってこれそうなこと、言ってたから」

かりんの言葉に内心ほつとしながらも、浩一は質問をかさねた。

「じゃ、なんでわざわざそんなあらたまった言いかた……」

「だって、人間なんて、いつ死んじやうかわからないじゃない」

「かりん、なに言ってる……」

浩一の言葉をさえぎるように、かりんが先をつづける。

「だから、いつ死んでもいいように、言いたいことだけは言っておこうと思って……。ごめんね。わたし、きょうはすこしナーバスになってるみたい。自分でもわかってるんだけど、どうにもならなくて……」

小さくため息をつき、浩一は言った。

「あんまり、思いつめるなよ」

「うん」

「なんなら、おれがいつしよに寝てやっても……」

「……ばか」

「今のは、ちょっと調子に乗りすぎたかな」

「ううん、浩ちゃんにそんな勇気ないってわかってるから、ぜんぜん」

「ちえっ」

「くすっ。そんなことより、ちょっとだけ、想いで話につきあってくれない？」

「おもいで話？」

「うん」

「……いいけど」

「ううん、なにかから話そっかなあ……」

かりんたち琴宮一家がこのマンションに引っ越してきて、ふたりがはじめて出逢ったときに起きた、ちょっとしたハプニングを皮切りに、尽きることはない回想談で秋の夜は更けていった。